

磐城公論

福島縣石城郡平町字研町十九番地
編輯兼發行人 山田 政一 好
印刷所 二葉印刷所
福島縣石城郡平町字研町十九番地
發行所 磐城公論社
電話四〇八番
廣告料 五號十二字詰一行五十錢
場所指定拾錢増
定價 一部十錢 一年貳圓四十錢

維新の光を仰いで

(年頭斷感)

「新年おめでたう！」

私は、先づ第一に、平凡道徳の習慣に、従つて、か觀すれば、恰もそれ、そのく年頭の賀詞を、甚だおおくむかし、嶮峯二萬尺のアルればせながら申し上げる。フスに、馬立て、お互に、舊年は、黒衣を纏ひ、天地諒闇の哀愁に閉されて滿一年を過した。さらでだに世界大戰以來約十年に亘る、深刻にして長期なる不景氣のドン底に生活苦を満喫して、辛生々活を營み來つた一般大衆にあつては、此の一年か？

平野は、眼下にあり！」

た英雄大ナポレオンの雄姿を彷彿たらしむるではないか？

敬親やまぬ 磐城公論讀者大衆諸君！ 英雄日本は建國三千年來

一君萬民 上御一人下萬民の國體の精華を發揚して、昭和維新の今日に至つた。

「維新の光を仰いで」 昭建國三千年來の理想は！

和維新、更生日本の前途に 緑衣の華装して、立大化改新の理想は！！

皆さん！

昭建國三千年來の理想は！

「維新の光を仰いで」 昭建國三千年來の理想は！

和維新、更生日本の前途に 緑衣の華装して、立大化改新の理想は！！

明治維新の理想は!!!

此の三大理想は、『世界の大日本建設』にあるのだ。而して『世界の大日本建設』の理想實現の聖業は、昭和三年一月元旦より始まつたのだ。

ボヤ／＼として、無意識的半死生活をやつて居ては、駄目だ。國亡民滅あるのみだ。

の三大理想を、現實化するべく決死的覺悟を以つて、民族的大感激の熱血を沸騰させ『世界の大日本建設』運動の第一線に先驅するは、正に是れ、昭和聖代の國恩に報ずる第一義的最先の使命だ。

全磐城の大衆諸君！此の民族的愛國運動に奮起して下さい！此の一元的理想實現のために、資本家も、労働者も、官吏も、民衆も、男も

女も勇敢に健闘して下さい。就中、青壯年諸君は、一死以つて健闘を誓ふものベストを盡してやつて下さる。

斯く云ふ不肖も『世界の城の平和を祈つて筆をおく終りに、世界と日本と磐城と。斯の哲言以つて、氏に適應すべしだ。

世の所謂、會社の社長など、いへる人々は、使用者を奴隷の如く輕視し、ボロ會社、泡沫銀行の頭取、社長なるにも拘はらず、天下の社長、頭取一人と威張りくさつて居れど、一度正義の筆劔を振つて、暗黒なる内幕のカラクリを曝露するや、晴天のヘキレキ一聲、忽ちにして周章狼狽、或は金銭を、又は美妓を、或は暴力を以つて正義人の蹶起を抑壓せうとする。その心事の低級なる唾棄すべしだ。

さはれ、余が尊敬する、新妻 盛氏は、郷土磐城が生める大宗教家、佑天上人の血縁者として、由緒正しき祖先の系統をもつ。

而も、身は四倉電氣株式會社の社長として、温情以つて社員を優遇し、春風以て人に迎接し、一度も怒色殺氣を見ず、靜かなる事林の如しだ。氏の如く、練絹、羽二重の如く感情の陶

治せられたる仁極めて稀ある。

「氏より育ち」

と古き諺にあるけれども、矢張り氏——祖先の系統は自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

郷土磐城の「自然と人物宣揚」

郷土磐城の「自然と人物宣揚」

◎仁井田浦とその環境及人物(二) ◎人物之部 ◎新妻 盛氏

現代は似而非紳士、ベテかけては敏感なる第六管神經にある。宗教家にして人妻諸君の中、尊敬するに足る子を毒し、政治家にして、深觀一番すれば、甚だ？と利權争奪に狂奔し、官吏に云はねばならぬ。此の一事して職權を濫用し、新聞記者に讀者諸君に敢て問ふ？者にして、社會の公器を冒しかるに、わが新妻 盛氏に、公器たる新聞は、氏は、所謂『實業家』とは、社會の兇器となり、木鐸たる人格、性行を全然異にしてる記者は黨人の奴隷、富豪居る。

の御用達、資本家の番犬と一言以つて云へば、氏は會社の社長として、温情以て社員を優遇し、春風以て人に迎接し、一度も怒色殺氣を見ず、靜かなる事林の如しだ。氏の如く、練絹、羽二重の如く感情の陶

◎年頭之願誓

冀はくば梅花と俱に新なる、潑刺、生に向つて進轉流動する生命に點火して、「郷土にのこされたる使命」を貫行せん

「品性論」の著者 サミエール、スマイルズ博士はいふ「人格は財産である」

斯の哲言以つて、氏に適應すべしだ。

世の所謂、會社の社長など、いへる人々は、使用者を奴隷の如く輕視し、ボロ會社、泡沫銀行の頭取、社長なるにも拘はらず、天下の社長、頭取一人と威張りくさつて居れど、一度正義の筆劔を振つて、暗黒なる内幕のカラクリを曝露するや、晴天のヘキレキ一聲、忽ちにして周章狼狽、或は金銭を、又は美妓を、或は暴力を以つて正義人の蹶起を抑壓せうとする。その心事の低級なる唾棄すべしだ。

さはれ、余が尊敬する、新妻 盛氏は、郷土磐城が生める大宗教家、佑天上人の血縁者として、由緒正しき祖先の系統をもつ。

而も、身は四倉電氣株式會社の社長として、温情以て社員を優遇し、春風以て人に迎接し、一度も怒色殺氣を見ず、靜かなる事林の如しだ。氏の如く、練絹、羽二重の如く感情の陶

治せられたる仁極めて稀ある。

「氏より育ち」

と古き諺にあるけれども、矢張り氏——祖先の系統は自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

賀正

平銀行頭取 山崎 與三郎

元代議士 安島 重三郎

釜屋商店主 諸橋 久太郎

磐越銀行頭取 中野 甲藏

磐城實行専務取締役 鈴木 辰三郎

東部電力株式會社平營業所 所長 武田 精一

堀江工業株式會社 江口 忠一

小田炭礦株式會社 小田 吉治

萩原 伸八

前縣會議員 小野 晋平

足る言行を表現せよ！

たとひ千萬の私有財産ありと雖も、又頭取、社長なんど、社會的地位の優越感に自己陶酔するも雖ども、現代の大衆は、封建時代の愚民衆の如く盲目的に、金や位や權には盲従はしない。諸君は、新妻氏の如く、士として一般大衆より滿腔人格的に生きよ。春風以つて敬意を表されて居る、かて温情以つて人に接せよ。らには、出處進退、一舉手而して秋霜以つて己れを蕭一投足、大衆の手下とする正せよ。

處女作 (小説) 歸去來 (一) 綠雨生

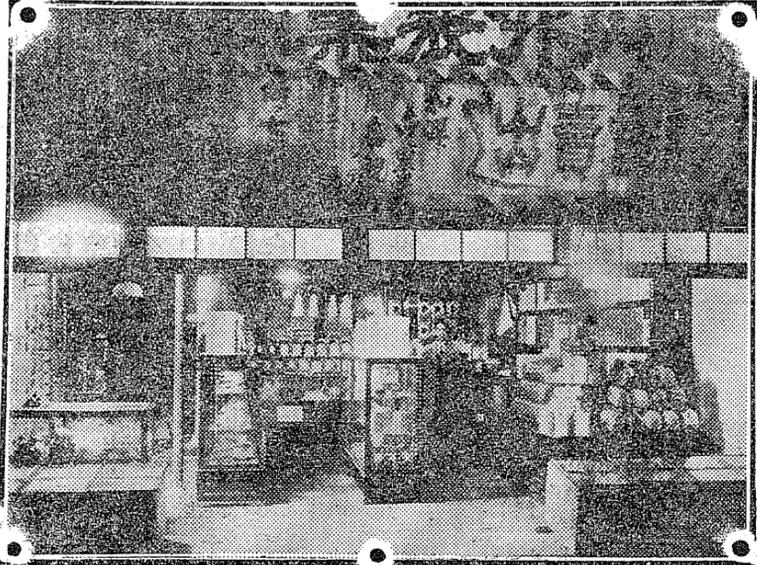
此の小説を處女作する動機

自分は、文筆労働者となつて、六年の日月、短かくも感じ又長くも思はれてならぬ。自分は、評論家を以つて任じ、常に一個の立言者たる立場に於て、小論文をもつて、所信を主張し、問題を提供し、それが批判と解決を大衆に委ね來つた。一言にして云へば、私は、論客であつた、その私が如何なる風の吹きまはしか、又陽氣のせいには知らないが此度『歸去來』と銘打つた小説を處女作する次第とは相成つた。時潮に迎合してか? しからず。所謂現代の文化に軟化してか? 断じて、そうではない。サラバ、どんな理由か頗るアツサリしたわけがある。最近或る妙齡の芳紀正に廿一才の美女性より、私は奇抜な、そして勇敢な質問に接した。曰はく『緑雨さん? ナゼ、ドウして緑雨さんは、獨身でゐますか酒を飲んだり、議論をしたりケンカ口論ばかり仕事にしてゐますか?』

「恩讐の彼方に生きよ...」即ち此の一大天啓に接し、私は、彼をゆるした。彼とは何? 者私は永遠に彼とは誰と云ひたくない。サテ、私は群血を浴びて頭腦に打撃を與へて以來心の平均、氣分の統一、精神の和平がとれなくて、今日でも困りぬいて居る。殊に、今日此頃の様子に、照るかと思へば曇り、晴れるかと思へば降る所謂秋の空にはトント閉口する。杯を擧げて、斯の幽憤を晴らさうとしても、駄目。郊外に秋色をたづねて故山の秋興如何にと杖を曳けどもこれも駄目。大洋に直面して、すべてを忘去せうとしても、秋の海にいたづらに吾が哀感をそつてやまぬ。松ヶ岡公園山頭、名月を仰いで、すべての憂悶を放散せうとしても、到底駄目。『一體全體山田緑雨汝はどうしたらよいのか?』一つの心は叫ぶ『生れふるさと、磐城平を去ればよいのだ。それで一切は解決するのだ。』『クタバレばよいのだ...』死は一切を解決する。しかも、い、よ、うに解決す。『祖先の亡靈は一刻も早く世の中をさきあげてわが愛するものよ...早く來な...』コノ死の世界コノは...? コノ死の世界コノは...? 兄分になつたではないか? おとなしく早く學校へ行け。ソレ、授業始めの鐘がな

動機を以つて、此の外に... さらでだに、憂きことの多き世の中ではある。地コノ小説を處女作する次第となつた。闘士、山田緑雨は見合ひに引き出さるゝ二九の處女... 純情を抱いて本紙の愛讀者諸君に、見えやうとします。小説になるか、ならないか甚だ心配ではあります。どうか御一讀の上御批評下。 (十月十七日記ス)

社頭の老杉に投石する三悪童。健チャン... 民チャン... コノ杉の木、でつかいな、石ぶつつけてやつべい。『ようし... よかつべい...』拳大の石は、社頭の老杉目掛けて、一つ、二つ、三つと三人の頑悪童より一齊に投射された。縣社子緞倉神社々頭の老杉は悲鳴をあげて叫ぶ。『ア、イタ、ア、イタ、そんなに俺をやつつけるなよ俺も、數百年來コノ社頭に簞え立つて、お前達の五代も六代も前から先祖代々コノに突つ立つてばかり居るものだから、草臥れてしまつた。もう... 立枯れの悲運は、俺を見舞うであらう... 健坊も民坊も、そして悪たれ小僧の政坊の野郎も尋常二年生になつたではないか? 兄分になつたではないか? おとなしく早く學校へ行け。ソレ、授業始めの鐘がな



アオトス。一デンヤキ野永

藤原村 三井礦山 湯本礦業所 株式会社 四家 秀行 平町二丁目 電話七五五番 住吉屋支店 草野染工場 赤心堂病院 正月屋

石城郡豊間村 大敷綱事務所 川部村 長兄王萬平 助 役加茂元吉 田子兵馬 蛭田郡藏 小野魯平 村會議員 兒玉太久 田子兵馬 蛭田郡藏 小野魯平 銘酒四時川醸造元 小野魯平

上遠野村 鈴木省吾 吉田房吉 松本幸太郎 蛭田敬一郎 櫛田吉太 上遠野庄松 會出屋商店 福屋吳服店 共英舎牛乳店 大平 一二 小澤 光次 磬城共濟病院

平町之部 會川卯三郎商店 吉田寅之助 織田材木店 イワキ食堂 住吉屋本店 高岡屋商店 宗像國治商店 柏木支店 關内半平商店 新藤屋本店 佐藤鐵工所 大平屋藥舖 常盤屋時計店 山家メリヤス店 會津屋商店 和久井屋漆器店 綿引印房 花澤久一郎商店 坂田金物店 大村屋旅館 江尻康平商店 伊關吳服店 藤市蒲鋒店 清光堂書店 丸ほん家具店 佐川洋服店 大勝園茶舖 龜田屋吳服店 中野吳服店

